

含徳の厚きは、赤子に比す。蜂蠆虺蛇も螫さず、猛獣も扱わず、攫鳥も搏たず。骨弱く筋柔らこうして而も握ること固し。終日号びて而も嗄れざるは、和の至りなり。和を知るを常と曰い、常を知るを明と曰う。生を益すを祥と曰い、心氣を使うを強と曰う。物は壮なれば則ち老ゆ。是を不道と謂う。不道は早く已む。

【大体の意味内容】「徳」を内面を含むこと厚い存在は、赤ん坊に譬えることができる。な

ぜか赤ん坊には、蜂やサソリや蝮も刺したり咬んだりはない。猛獣が襲いかかること

もなく、ワシやタカのような猛禽類の爪にかけられることもない。骨は軟弱で筋肉も柔ら

かいが、そのくせ握る力は驚くほど強い。一日中泣き叫んでも声が嗄れないのは、かれ

ひとりが暴発しているのではなく、その場の空気、湿気、温度、風などの環境世界と調和

しきっているからだ。「和」を知ること、永久不変の「常道」といい、その「常」を知

ることは、「明智」という。かくして生命力が益々盛んになるのを「祥瑞」すなわちめで

たいしるしといい、心が氣力をコントロールするのを「強」という。

しかし物事は見かけ上、強壮であるとすぐに老化する。これを「不道」、永久不変の

常道から外れているというものだ。「不道」徳なものは、早くに滅びてしまう。

丸木位里・俊夫妻の連作日本画『原爆の図』（第一部幽霊と第十五部長崎）は、原爆投下後の惨

状を描いた執念と祈念の轟（とどろ）きとも呼ぶしかない絵画群ですが、その中に描かれる赤ん坊たちの姿

の多くが、無垢無傷で美しいことと目を奪われます。悲惨な中での救いが垣間見えるようでもあります、

かえって刃物で内臓をかき回されるような怖気も催します。すでにこと切れて死んでいるには違

いないのですが、生きているか死んでいるかということよりも、この何事も拒まず、すべてを受け入れ、やすらいでさえいるかのような小さな存在を、すさまじい地獄絵図の中にちらちらと潜ませていることが、実はこの連作の中心テーマなのではないかと…

赤ん坊たちは、誰のことも恨んだり呪ったりしていません。

この子を守れなかった母親の悲しみ、家族の亡骸を抱えて絶望する人、恐怖に泣き叫ぶ人、命を助かろうと顔をゆがめて逃げ惑う人、放心する人…

まだ命あるがゆえのさまざまな情念と裸形とがむき出しになる。どれも、人間としての真実の形なのでしょ。



これら群像を観ていると、不思議に生きる意欲がわいてきてしまうのはなぜだろう。私だけが変な奴なのか？

作者である丸木夫妻ではなく、描かれた亡魂たちが、観る者に咆哮しているのかもしれない。

「生きろ！」と。